中央評論 212（昭和25年）一九九五年六月

てしっかりした岩は沢登りに比べると快適である。ただし、私はこの岩場でクライマーとしての素質のなさを痛感させられることになる。

八ヶ岳や北アルプスでひととおり雪山の経験を積むと、仕上げは冬期の富士山である。冬なのでバスは通っておらず、富士吉田から歩いて五合目まで登り雪の中にテントを張る。翌日、このときばかりはかなり緊張して頂上に向かったが、好天に恵まれてあっさり登頂してしまった。冬山はコンディション次第である。山頂の避難小屋で零下二五度だったことをおぼえている。

ところで、肝心のヒマラヤ遠征はどうなったのだろうか。時代は、ウォーラーステインのいう反システム運動がまっさかりとなった。それと並行するようにして、私も映画館やジャズ喫茶（いまや註が必要だが、省略）に入りびたっては、文学や映画、芝居といった得体のしれないものに深入りするようになってしまったのである。『日本百名山』の深田久彌が、どこかで、山の空気に染まって帰ってくると仲間の文学青年たちの饒舌な論議がなんとも薄っぺらなものに思えてくる、というようなことを書いていたが、私もそんな軟弱な方向に一歩を踏み出したわけである。数年後、私は出身地に近い中国地方のある都市で仕事に就くことになり、東京周辺の山々に別れを告げた。

いま、ペデストリアン・デッキから、四半世紀前に親しんだ山々を眺めるとき、時間のギャップがどうしてもうまく繋がらないのである。もう少しで何かがつかめそうなのに触れることができない。はじめに、既視感とか時間と空間の感覚の混乱といったのはこのことである。自然は恒久であり、人間は奇妙な想念にとらわれて右往左往するはかない存在だ――確かにそれに近い思いだといえるが、それだけではない。そんな教訓めいた観念だけで人はオプセッションにとらわれるものではない。

それが何かを確かめるには、もう一度同じ山に登ってみるのがいいだろう。だが、体力が落ちているからまず京王線で行ける景信・陣馬あたりから、と軽い気持で縦走に出かけたら下りで膝を痛めてしまった。齢はあらそえない。ジョギングか水泳の基礎トレーニングからやり直すしかないだろう。中年になるとアイデンティティの追求も手間がかかるのである。

大学の先生は嘘をつく（?）

中川洋一郎
（経済学部教授）

予備校での人気教師の条件として、「人生訓を授業の中で話してくれる」というのがあるという。私なども予備校の人気教師には及びもつかぬが、それでも『大学箴言集』なるものをこしらえて、受講している学生たちが少し飽きたような様子の時などに使っている。高校までの「勉強」と大学での「学問」とはどこが違うのか。例えば、こんな話題で何か「ため」になることを言おうとすると……

四月の新学期。最初の講義の時間。学生たちは時間割を見て、お目当ての講義（西洋経済史）を決めてから教室にやってきて、担当教員（中川）が来るのを待っている。彼らはわれわれ教員の顔は知らない（はず）。私は教室にはいると、トコトコと教壇に赴き、マイクを取り、ちょっと間を置いた後、もったいぶって厳かに宣言する。

「初めまして。私が××です。どうぞよろしく。今日から一年間、私と一緒に、学問の中の学問、科学の中の科学、人類の大いなる遺産、○○学を勉強しましょう」

××と○○には、私と全く同じ時間に別の教室で開講している同僚の教員の名前と講義科目名がはいる。当然、学生たちは、中川の西洋経済史を受けるつもりが、別の教員の名前と講義科目名が出てきたので、「教室を間違えたのではないか」と慌てる。どよめく。

「えええーっ。嘘だよなあ?」

「うっそーっ。何かの間違いよねえ?」

などと彼らは互いの顔を見合わせていぶかしんでいる。私は、にやにやしながら教室を眺め回した後、ひと呼吸を置いてから言う。

「そうだよ、嘘だあああよ。……大学の先生は嘘を言うから気をつけましょうね」

これが私が考えたジョークのうちで一番目に良いものである（ちなみに、一番良いのは、同じく最初の時間に成績評価について触れて、「私は美人にはSやAは付けません。顔で成績を付けたと言われるのは沽券にかかわるからです」と言った後、一〇秒間くらい教室中を眺め回してから、「でも、ご安心ください。今年はたくさん出せそうです」と言うもの。甘く成績を付けてあげますよという含蓄のある良いジョークだと私は思うのだが、しかし、学生たちは私の温情（?）を感じるより先に「嫌みだ」と取るようで、ウケが悪い。残念だが、最近は使っていない）。

学生たちを見ていると、せっかくの四年間、自由に学問ができるのに、それを無駄に過ごす人が多い。本当にもったいないと思う。学問と勉強の違いに思い到らないからではないか。高校までの「勉強」と大学での「学問」とは大きく異なるのである。

高校や予備校でも優れた教師は多面的なものの見方をきっと教えてくれていると思う。しかし、何と言っても、「大学入試をやがては受ける」という決定的な制約がある。入試は記念として受けるべきではなく、受かるために受けるものである。大学入試では、「答はたった一つ」、これが普通。もしも、入試問題で答が二つもあったら、それは悪い問題。出題者はきついお咎めを受ける。良い問題は、「答は一つ」。従って、高校・予備校での授業は、正しい答をいかに早く「発見」するかが眼目にならざるをえない。正解発見。どこかにある「正しい答」を素早く見つける訓練をすること、

これが受験勉強である。

その結果、勝敗の鍵は記憶力と集中力になる。高校までの学校秀才とは、高度な記憶力によって保持している大量の知識を、強力な集中力でもってフルに働かせて、たった一つの「正解」を誰よりもいち早く発見できる生徒である。

大学での「学問」はそうではない。まず「答は一つ」とはかぎらない。イデオロギーやそれぞれの立場が違うと考え方が異なるので、答がいくつも出てくる。論者が置かれた状況の違いによっても答は変わってくる。初期条件を厳密に設定して正解を求めるような計算問題は別として、経済学や歴史学のような社会科学・人文科学では、答はいくつもある。あえて言えば、「正解」はない。八〇％くらい正しい答はあるかもしれない。しかし、その八〇％正しい答も、来年になって条件が変われば、五〇％位しか正しくないかもしれない。

われわれ大学の教員も、つこうとして「嘘」をついているのではない。「真実」を、「真実」だけを語ろうとはしている。しかし、ひとりの教員の「真実」も、別の立場からみると「嘘」になってしまうのである。このような多元性は社会科学・人文科学には不可避的であると思われる。

さらに、「答は一つでない」どころではない。大学の「学問」では、そもそも問題さえも与えられていない。学生はどこに問題があるのかを、自分で「発見」しないといけないのである。高校までの勉強が「正解発見」であったとすれば、大学での勉強は、むしろ、「問題発見」である。問題を発見する力、これが大事。「正解は一つしかない。それを見つけるのが勉強だ」と考えている学生は、大学教師の目からみるとあまり伸びない学生である。従って、気の毒ではあるが、「高校までの学校秀才には、むしろ、辛いのが大学」といえる。

問題がどこにあるかを発見する。たくさんの本を読んで資料を集める。自分の頭で考える。人の前で自分の考えを発表する。異なる意見の人と議論する。問題の解答を練り上げていく。このプロセスを繰り返すほかない。その経験の中から、総合的な真の知的力量を高めていくのが大学である。

では、具体的にどうするか。生まれながらの天才的なスイマーならいきなりプールに放り込まれても泳げるようになるかもしれない。しかし、われわれ凡人はそれでは一遍に水泳恐怖症に陥ってしまう。泳ぎを覚えるには、浮き輪を付けて浅いところから徐々に水に慣れていくしかない。同様に、「問題発見の仕方を学べ」などと言われても戸惑うばかり。従って、問題発見から解答練り上げの一連のプロセスを学ぶ過程でも、水泳修得のように、段階を踏んで、しかも、一段毎の達成感があることが望ましい。

それには、月並みだが、ゼミがよい。ゼミに積極的に参加することを強くお勧めする。興味のあるテーマのゼミなら理想だが、かりに第二志望のゼミでも構わない。人には運不運や相性不相性は付き物だから、運悪く第一志望のゼミに落ちても、「あのゼミじゃなくっちゃ、ヤダ」などと幼稚な繰り言をせず、とにかくゼミに入る（経済学部においては公共経済学科を除く三学科では希望者は全員がゼミに入れる。在外研究明けの今年のゼミ募集で、たった二人の応募者しかなかった私が言うのだから、本当だ）。一度入ったら骨を埋めるつもりで頑張る。ゼミでは必ず発表させられるから、この機会を一世一代のハレ舞台と考えて、常日頃の自分の考えを人前で大いにしゃべると良い（気持ちいいぞお）。これを繰り返すうちに、例の「問題発見から解答練り上げ」までのプロセスが自然に身に付いてくる（はずである）。

そこで、最後に、私の幻のベストセラー（？）『大学箴言集』から、警句をひとつ。

「高校の先生は嘘つかない。
大学の先生は嘘をつく」

（© 1995 Y. NAKAGAWA）

インターネット日記

関口定一
（商学部助教授）

「インターネット、便利だ、すごい。世界中に電子メイルが送れる。自分の部屋から海外の美術館にアクセスして、絵を楽しんだり、音楽だって聞ける。ホワイトハウスで飼われているネコの声、も聞いた？」[1]

「インターネット？　だれが使うの？　ほんとに使えるの？　ほとんど英語の世界だぜ。実際、海外にe-mail送る相手がいるやつが何人いるっていうの。」[2]

新聞、雑誌にインターネット(Internet)[3]に関する情報は、毎日うんざりするほど掲載されているのに、その実態はなかなかはっきりしない。まして、自分にとっていったいどんな意味があるのか検討もつかない、というのがパソコンやネットワークに縁遠い、大方の気持ちではないだろうか。さきの二つの見方も、それぞれインターネットの真実である。以下に掲載するインターネット利用日記の抜粋もまた一研究者が経験したインターネットの真実の一端である。

＊

一九九三年
六月某日
東京大学のホスト・マシンにモデム[4]を通じてアクセスすることによって、インターネットに接続できるようになる。在外研究から帰国後間もなかったので、一カ月前まで滞在した[5]Cornell University[6]のシステムにtelnetを試みるが、周到にも（当然か！）[7]小生の客員研究員時代のアカウントは抹消されていたため、接続を断念。せめて図書館のオンライン・カタ